
ヘルまんだむ！

桂菊菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘルまんだむ！

【NZコード】

N1481D

【作者名】

桂菊菊

【あらすじ】

ネット好きな男四人が何万分もの確率で選ばれた！？ギャグ満載の学園コメディー。

序章・ログインの手続き（前書き）

「キレイ」は諸事情によつて中止しました。その代わりといつてはなんですが、練りに練つて考え出しましたのがこれです。下手クソだつたとしてもそれは僕が未熟なせいです。しかし、全作よりは自身はありますのでどうぞお読み下さい。

序章・ログインの手続き

東アジアの文明国、日本。

そこでは、いつ何時でも昼夜問わず活動がなされている場所がある。インターネット。

老若男女誰でも利用可能なすばらしきシステム。

得たい情報を新鮮なままで享受できる。

買い物や映画の予約も可能なのだ。

しかも、チャットやメールで世界中の人々と通信出来てしまつ。まさに神の思し召し以上でも以下でもないタマモノである。

しかし・・・・・

そのインターネットは、元はアメリカ軍が、軍機密や情報網を守るために開発された軍事機関なのであった。

要は戦争の道具なのであつた。

おそらく、この平和ボケ国家日本でインターネットをその目的に使用する者はおるまい。

いや、

いたのだ。

このインターネットを、原点回帰して、

戦争目的に使用する者が。

いや、組織と言つべきだらうか。

とにかく、それを前提にして、この作品をお読み頂きたい。

主な登場人物紹介

・近藤
進歩

主人公。ハンドルネームは「ヘルまだむ」。千葉の川崎出身。パソコン（特にギャルゲやオンライン）が好きな16歳。「ギャルゲ」と言えば小一時間ぐらいは話し続ける。嫌いな人は荒らしや寝落ちする人。

・ 沖田 健八
けんぱち

愛知の三好出身の今年16歳の少年。ハンドルネームは「丸木怒」。^{マルキタ}見た目はいい顔をしているが、あらゆるサイトで荒らしを行う極悪人。いくらアク禁しても、磨いたアクセス技術ですぐに侵入する。

・ 山口 登魯
とう

東京の秋葉原出身のやはり16歳。ハンドルネームは「じゅーひー」。生まれた頃からコンピュータに触っており、あらゆるソフトを乗り越えてハッキングを行う、丸眼鏡をかけた少年。妙にイヤミな性格。防衛省の極秘情報を盗み見たこともある。

・ 坂本 真九郎
しんくろう

高知の四万十市出身の言うまでもなく16歳。ハンドルネームは「坂本真九郎」、というかハンドルネームの概念すらなかつた。まんまと言つていいくほどの田舎者。インターネットどころかパソコンにもろくに触ったことがない。天然ボケで抜けていることもある。口癖は、「アハハハハハハハハハハハハ」。

序章・ロケインの手続き（後書き）

まだ前書きをとりプロフィールのみです。期待して下さればうれしいです。

第一章・試験－週間前ぐらいからゲームは止めた方がいい（前書き）

試験前だつたにつき、更新が遅くてすいません。一応しつかりと書いたつもりです。読んで下さい。

第一章・試験一週間前ぐらいからゲームは止めた方がいい

20007年12月某日 千葉 川崎

「だあああ！……ちくしょう！誰だよ！誰なんだよ！」

自分のパソコンの前でこうぎやあぎやあ喫いている少年が一人。彼は今オンラインゲームをプレイしていた。

「ううう……こんなにブレイングがいいやつは初めてだよ……うわ、攻撃力……ぶつつつ……6000…？高ああああ！レベル89のオレでも1296なのに……レベル……たつた10で6000…？どんだけ高^{すすむ}けーんだよ！」

彼の名前は近藤 進歩。ネットゲ^どギャルゲをこよなく愛する少年。彼は今、プレイしているオンラインゲームで、レベルの割にはとてもなく能力値の高い戦士（正式にはコーラー）と遭遇しており、コテンパンというか、あたかもワカメがそつされるみたいにやられていた。

「ひいい・・・殺される！アイテムアイテムウウウウ・・・・・消えてる――――――！」

なんと、彼が今まで貯めてきたアイテムがなぜかキレイさっぱり消えていた。ホンのせきまでは価値的に50000ゴールド（ゲームでの定番の通貨、というよりベタなような……）相当のそれを持っていたのだが全て失せていた。

「やばいやばいやばいやばい……もう攻撃も防御もままならん！ちよつと……そこに戦士お……助けてください……」

・・・といふ意志を伝えるべく

ヘルまんだむ：ただ今死にそうです。助け求ム

と自分のすぐ近くにいる戦士にむけ書き込んだ。

「誰でもいいから・・・」の化け物を・・・
すぐに返事が返る。

タク(切) ド・ド・ド魔・るせーんだよ
ひめーでなんとかしめりのキモオ

続いてこう書き込みが。

ド・キリ・魔：切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ
しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ
切腹しろ切腹しろ切腹しろ・・・・・

「これかいいい！『切』つてこれの布石だつかんかいいいい！！つうか・・・これつてあの荒し魔『マルキド』じゃねえか！名前もマルキドをひっくり返してちよつと変えただけだし！（マルキド キルマード・キルマード・ケイド魔）

そう、彼、マルギーには正式名称を「丸木怒」という。知るに知られたサイトをヤバイほど荒らしまくっている悪名高いヤツである。ちなみに、以前もこのオンラインで、コーディー達から

「てめえ！何しやがる！泣かすぞ！」

じめてるよー。」

「俺の嫁」

・・・などと云々句が發せられたるほど荒らしな

禁止になつたのだが、いつの間にか復活していた。

「やつこーちゃん…オレもひきのー。」

と、進歩の方だが、助けを求むのはあきらめ、命からがら逃げてき

て、ログオフした。

その後、彼は静かにインターネットを楽しむことにした。
「新しいギャルゲの情報見つけるとでもするか……」

前述の通り、彼はギャルゲが好きなのもある。

どれくらい好きなのかというと、およそ「バクバクめもりある」「バクバクめもりある」等の有名なそれは全て購入し、攻略法や全キャラの名前は3日程度で把握出来るほど。試験前などでもきっちりやってしまう（それ故成績は低い）。後、「ギャルゲ」と言えば小一時間ぐらいは……え？前書きで言つた？じゃあ言わない。

「ふんふん 彼女いない歴二年半 中一につき合つてた娘いたけど半年でわかれつた、でも気にしない」

やけに説明的な歌を口ずさみながらネットを散歩していると、彼はふと変なページに入つた。

「ん・・・・・？」真 恋愛オンライン・・・アハネ亜羽都学園！？」

彼は新しいギャルゲのサイトを見つけた。しかもオンライン。

彼がこれに飛びつかないはずがなかつた。ハンバーグと卵が好きな人は目玉焼きハンバーグを見て飛びつかないハズがない。それと同じである。（そうかあ？）

「『真 恋愛オンライン 亜羽都学園』、かあ・・・・製作会社は・・・ONAMI・・・ってバクメモと同じ！」

ONAMIとは、進歩の愛用している「バクバクめもりある」を作つた会社である。他には「Sing Sing Revolution」や「超戯王」などを作つている。（現実世界に似たような会社及び作品名があるのは『恋愛嬌』）

「なるほど・・・・ふんふん・・・ん！登録コーナー名と、本名、年齢、性別、住所、電話番号、メールアドレス・・・・を入力して下さい・・・細かいなあ、おい。」

すると彼が一瞬ひやつとする記述が目の飛び込んできた。

『なお、13～18歳でない方は当オンラインゲームを利用出来ま

せん『

ぶつつつつつ！

彼は思わず、漫画で、おどろいて水を吐くアクションみたいに口から空気を吐いた。

危ないところだった、と彼は思った。彼は15歳。来年で16だが、余裕でクリアしている。しかし、なんでこんな制限を設けるのか進歩は理解出来なかつた。

「ゲームを18以上がやつてるとニートになるつてか!? オレはそんなんなる気はなーけど!」

とはいって、彼も来年は高校。どこか受けて入学せねばならないが、前述の通り、彼は成績が非常に悪い。おかげで、もし仮に『こんな高校、通つてる奴バカじやない? ていうか馬鹿じやない? ていやかVAKAじやない?』ランキングというものがあつたとして、その一位の高校に入れるかどうか怪しい状況なのである。しかし本人はほとんど気にしてない。

「・・・・よし、これ・・・・で・・完了つー送信!」

クリックすると、このような表示が。

『ありがとうございます。後ほどに次連絡がありますので、お待ち下さい。なお、当オンラインは4月から正式にご利用になれます。』
「来年か。ま、楽しみに待つてるか!」
こうして彼はログインした。

「運命」という名のオンラインに。

第一章・試験一週間前ぐらいからゲームは止めた方がいい（後書き）

一日以内にまた投稿します。お楽しみにして下さい。

第一章 - すいませんつて便利な言葉だよね（前書き）

次話投稿いたしました。ギャグは少なめです。

第一章・すいませんつて便利な言葉だよね

2007年12月某日 愛知県二好町

「ん?なんだこのサイトは……ほ……よし、来年
の荒らしのショバはここに決定^{けつてい}。……ログインっと。」

12月某日 東京 秋葉原

「おやおや？また変なサイトが・・・・変なプログラムのにおいてがふんふんするな～、ふふふ～うわ・・・すごい技術だな・・侵入は簡単にできないな・・・ログインしてみても、面白くないことはなさそうだね、フーン」

12月某日 高知 四万十市

「お？なんね、これ？真・・・にてわしと関係あるんかの？・・・名前と住所と・・・書いてくれがと？アハハハハハハハハハ
ピュうたあ』の命令なら仕方ないの』アハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

その後

2008年1月某日 千葉県川崎

「あー・・・・進路どうしようかなー」

彼、近藤進歩は外をぶらぶら歩き回っていた。さすがに彼もどこの高校に入るかどうかについて焦っていた。しかし焦っていても『こ

んな学校通うて（以下略）ランギング一位の高校に入るかどうか怪しいその学力は変わらない。

な・・・例え、ONAMIとか・・・

そんなことをつぶやいて歩いていると、彼は自分のすぐ前方に車が

止まつたことに気づいた。それは少々大きい、てかる程、真黒い車だった。

「え？」

彼は突然の出来事に一瞬びっくりしたが、その間もなく、車から黒いスーツを着、サングラスをかけた、ヤクザチックともダンディともいえそうな、じゃあいつそまとめてヤクザチックなダンディかダンディなヤクザと、いえそうな一人組みがこっちに近づいてきた。やばい！！と、進歩が思つた頃には二人はもう話しかけていた。進歩に。

「すみませんが、君は近藤進歩さんですか？」

「は・・・・・はい・・・・・」

もう一人が続ける。

「やつぱり・・・・・・」

ほつとしているよつた、俺の言つたとおりだつたろ？みたいな表情をした。

そのまま続けた。

「なるほど。遅れましたが、私たちは警官でしてね。」

と、スーツの中から警察手帳を取り出しみせる。

「実はさつき、20歳くらいの若い女性がウチの署に来てね、人探しをしてるというんですよ。それで、その女性がいつた人相などの情報が君と一致してたから、車から思わず声をかけたんです。」

「いや・・・は・・・・そうですか・・いや・・・なんというかすいませんでした・・・・・」

別になんら悪いことをしたわけでもないのに彼は謝るしかなかつた。

「で、時間がありましたら同行願えますか？」

「え・・・はい・・・・えと・・・・わかりました・・ので・・・・こちらこそ・・・お殺さないようお願いします・・・・・」

「わかりました。おい、車にお乗せしろ。」

「後部座席でいいんだな？」

で、彼は非常にがちがちしながらそのテカテカ光る車に乗り込んだ。

表面がテカテカなら内部もテカテカで、ワックスでもぬつてんじゃない、こいつはギミックだ。」
ギュウ、二階だ。
「

「あの、良ければこれ、お飲み下さい。」

と、男が紙コップに入つたお茶を渡してきた。しかし、進歩は緊張のあまり飲めなかつた。

だまつて座つてると、進歩はこんな会話を聞いた。

・・・・・お・・・・・じ・・・・・わ・・・・・い・・・・
・・・・・ば・・・・・て・・・・・な・・・・・つ・・・・た・・・・
進歩には全てが怖くて怖くて仕方がないので、

「いやあの・・・いやその・・・すいませんといふか・・・すいませんじゃないくて・・・けつぎよくすいませんでした・・・と、つぶやくしかなかつた。

すると、突然車の扉が開いた。

と声がしたかと思うと、後ろから取り押さえられ、ハンカチを口に当てられていた。

「…んぐぐ…」「…」
彼は意識がうせてきた。

「十九世紀以來，中國社會的變動，是極為深刻的。」

彼は気づいた。そして一瞬とまどつたが、すぐに思い出した。

自分は確か・・・ヤクザチックなダンディかダンディなヤクザみたいな人たちが人探しとかいつて自分を車に連れて、なんかハンカ

チを口にあてられ……

あたりは一面黒だった。しかし、やつらの車みたいにこかつてはねらず、真っ暗闇だった。

いつたい自分はどうなるんだ……と思つていいたら

おい

「え? なんだ?」

おい。ちょっと。

「何? 誰かいるの?」

「誰かつておい……

声がはつきりした。

声の主は田の前にいた。

「ううむよ。えと……お前誰?」

「・・・・・・・・・・

進歩はだまつたままだった。

「えと……お前も万引きしたとか言われたのか?」

ついで

第一二章・すいませんつて便利な言葉だよね（後書き）

次回から核心に迫っていきます。お楽しみにしてください。

第三章・偽造が一コースになつたお菓子でもじぱりくすればまた食べられるよ

今話でプロファイールに出てきた少年達が全員登場します。

第三章・偽造がコースになつたお菓子でもしづらくなればまた食べられる

「えと……お前も万引きしたとか言われたのか？」
そう言われた進歩であつたが、なんのことかよくわからなかつた。
なぜなら、

「いや……オレは……とりあえず……警面(けいめん)……なんかオレを探してゐて……それで……いきなり眠らされて……」
眠つて以来どぎれていた、感覚が戻つてきた。がたがた揺れている。
トラックにでも乗せられてこるようだ。やがて、暗がりに慣れ、声
の主の姿が見える。

「あー……俺、沖田。おきたけんぱち 沖田健八(おきたけんぱち) ってんだけど。よろしく。」

自己紹介されたので進歩も返す。

「オレは……近藤進歩。よろしく……」

彼、沖田健八は見た目はいい顔をしている。少なくとも進歩には劣
るまい。いわゆる美少年という奴か、可愛いというか、爽やかなル
ックスである。

「どうか。お前はそんな感じで連れてこられたのか。だが俺は少し
違つんだ。」

「どんな？」

進歩は聞き返す。

「それはな、俺は三好……愛知県に住んでんだけど、ここに来る
前に本屋にいたんだ。」

進歩は黙つて相づちを打つ。

「『ジャソップ』や『スンティー』とかを立ち読みして、店の外に出よ
うとしたんだよ……その時にな……」

「その時？」

「アニメ雑誌『コーナー』に通りかかつてな、オタクっぽい奴が熱心に

『アヌメージョ』読んでたんだ。それでな……」

「くつ、と睡を飲み込んだ進歩。そして、こう続いた。

「からかっただらひなるかと思つて、通り際にそのオタクに、『

ツド・オブ・無職』って言つてやつたんだよ。そしたらさーそのオ

タク怒り出して、『無職じやない！－－－－－いや、フリーター

だ！』ってわめいてたんだぜー笑えるだねー。

腹が立つほどんきな声で健ハは言つた。

「はあああああー！－－－？？？」

当然のように進歩はいつもんだ。

「で、その後警察が来て、万引きしたうつて言われて、なんやかん
やでここに着いたわけさ。」

「いや、ついでみたいにラスト話やないでよーメインは『ツド・オブ
無職ー？後肝心な部分をなんやかんやせ、なしでしょーそのなんや
かんやを話してよー』

すると、

「ちゅうと・・・『ひやつひやこねこよー・・・静かにしてよー・

・・・

と、声がした。

声の主は進歩、健ハとはまた違う少年の声だった。彼の自己紹介
によると、名前は山口登魯とくといつらしげ。

「ふーん。君らもこのトラックっぽい所に連れてこられたんだ。奇
遇だねーふふーん。」

登魯は、アニメのネズミの声が1・2段階低くなつたような声でこ
ういった。丸眼鏡をかけていて、体は小柄。絵にするとグルグルの
入つている眼鏡少年といえようか。

「で、山口君はどうやって連れてこられたの？」

進歩が聞いた。

「えーと・・・警察に・・・なんやかんやで連れてこられた。」

「だからなんやかんやは何だつて言つてるでしょーがー！」

「うつせーな。俺ら寝起きで機嫌悪くーんだよ。百科事典の角で眉
間殴んぞ。」

進歩のツッコミに健ハがこう吐いた。続いて登魯も

「つたぐ、君は神経が太くていいね～・・・僕は繊細だからそんなことできないや～フフ～」

「・・・・・・・・・・・・」

進歩は何も言い返せなかつた。

「ん・・・・でもさ・・・なんでみんなこんなトラックみたいなのが乗つてるかわかんないし・・・ねえ・・・・・・」

進歩が控えめに言う。

「・・・・・まあ・・・しかたねえな・・話してやつてもいいけど・・・・・」

健ハ達は話し始めた。

まず、健ハは、オタクにキングオブなんとかといった後、書店を出た。すると、警官らしき人が前に出てきて、君万引きしただろ、という内容のことを言われ、もちろん健ハは否定したが、署で調べればわかる、とその警官は言つて、黒いてかてかした車に連れ込まれたかと思つとやいなや、後ろから取り押さえられハンカチを口に当てられ眠らせ、気が付いたらここにいたらしい。

登魯は、地元の秋葉原をぶらぶらしていると、いきなりまたしても警官と名乗る者から声をかけられ、こちらでひつたくりがあつて、犯人がこの通りを通つたので目撃してたら署まで証言して欲しいと言われ、急いでいると返答して去ろうとするが、逃げるのは怪しい証拠だとインネン付けられ、無理矢理引っ張られた。この後は健ハと同じである。

「・・・・つまり、オレも含めてみんな警察に連れてこられて、眠らされたわけだね？」

進歩はまとめた。

「ああ。俺ら、警察署まで運ばれてんじゃないか？」

「ホントに・・・最近の警察はひどいもんだね～。人の税金で食べてゐるのに偉くなつたモンだね～フフフ～～」

「ホンにえらいの～。でも漁師の方がもつとえらいきによ～」

「…………？…………ちょっと待て、お前誰だー？」

いつのまにか健八でも登魯でもない、もう一人の少年が会話に参加していた。今度は天然パークで、浅黒いサングラスを掛けた少年だ。「ああ・・・誰つて・・・ただの土佐っこじゃがの〜・・・・・」「ちがうつて。名前はなんだつて聞いてんだよ。」「進歩がつつこむ。

「ああああ、アハハハハハハハハ、そうじやつて。ホンにもう、おまんらはそそつかしいの～アハハハハハハハ」

「Jのとき、一土佐J」の彼を除く全員が腹を立てていた。Jは殺してえええと、怒りのパトスを炸裂させていた。
（しづくいひ）

れし坊の真力餅一で呑みきはな・・と湯で済風に「キ当たるうとしちよつたらなんやかん・・・」

「えいよ。なんか黒い服きたおんちゃんがこっちに来てな、こげな

「ハハハハハハ」

「えーとな・・・確か・・・ええと・・・あ、思い出しそうだ！」

「へと、『おこそこお菓子あるから、せこしかたりあがめ』じゃ

全員が黙り込んだ。いろいろと言いたいことがあつたから。

「なんだ、お前は！子どもの頃母ちゃんや先公にさんざん言われたこと覚えてねーのか！！『知らない人には付いていくな』って！オレは英単語をいくら忘れてもそれだけは覚えてました！」

「アハハハハハハハハハハハハハハ、うちのこ近所さんはみな家族みたいなもんじゃからの~」

すると健ハがこうこう。

「なあ、おかしくねえか？」

「ん。」

「俺ら3人は警察に連れてこられたよな、だけど、その、真九郎つて奴は明らかに誘拐犯みたいな奴につれてこられたろ。」

すると登魯が、

「じゃあ……」これはみんな誘拐つてことじゃない……？」

・・・・・・・・・・・・

全員が黙り込んだ。

「なあ……」

土佐つこの真九郎が口を開く。それに進歩が答えた。
「なんだ？」

「ひとつ気になることがあるんじゃが……」

「なにがあるのか？」

今度ばかりは信用して進歩が聞く。

「おいしこお菓子はどこにあるんかの……」

・・・・・・・・・・

また全員が黙りこんだ。今度は違う意味で。

「お前ええ————いい加減にしろ！ そんなにおいしこお菓子が喰いたいんなら、その、いつそテメーがお菓子になれ！」
特にいいツッコミが思いつかなかつた進歩。

「野郎！ お菓子の角で眉間殴んぞ！」

「いや、威力薄いでしょ！ 百科事典との格差は何！？」
「ん……みんな、ちょっと待つて……」

登魯がいった。

どうやらアラックっぽいものがとまつたらしい。

「おう！ やつとお菓子が食えるがか？」

「お菓子はいいくていてんだろうが……」

そして、次第に光が見えてきた。

第三章・偽造が一コースになつたお菓子でもじぱりくすればまた食べられるよ

そして、次回、前書きで書いたあの組織登場です！

第四章・個性的だと感じるところもある（前書き）

あまりギャグは面白くないですが・・・よひじくです。

第四章・個性的だと擴することもある

ツツ「//とともに光が見えた。

やつぱりこれはトラックだつたのだ。

窓が開き、景色が見えてくる。すると、さつきまで自分たちをさらつた誘拐犯達、ヤクザチックな・・・あ、しつこい?「めん、もう言わない。

誘拐犯達、黒服を着た男達が左右に整列していた。すると、男の中の一人が近づいてきた。

「では、お降り下さい。」

と、その男は言つたが、健ハがこうさけんだ。

「お前ら!俺たちをさらつてどうする気なんだ、こら。全員殺してもいいけどよ、後で少子化に響くだけだぜ。」

いや、オレらは殺されたくないから。勝手に人の運命決めないで。あと、4人程度じゃ多分響かないと思う、と進歩は思つた。

「それは・・・・その・・・・申し訳ありませんでした!」

と、男は頭を下げ、大声で謝つた。

続いて、申し訳ありませんでした!・・・と、残りの男達が揃つて謝つた。

「?????????」

進歩は戸惑つた。自分たちを誘拐した犯人が、なぜその本人に謝るのだろうか。だったら誘拐なんて最初からしなきゃ・・・と思つてたが、

「本当に申し訳ありません。手荒なお連れ方をしましたが、そうするしか方法はなかつたのです。では、こちらへおいで下さいますか。」

「あの・・・・ちょっと、ええかの。」

真九郎が聞く。

「お菓子はま・・・」

進歩は渾身の勢いで叫んだ。

その後、別のでかい車に乗せられ、別の所に向かつた。誘拐された時に乗りかけたあの黒い車のやたら横が広いバージョンと思えば差し支えない。

景色を見るひじりや、春と云ふようだ。ひじりに連れて行かれるのだろうか。

と進歩は膝に置かれたサンドイッチを見つめながらこう思った。サンドイッチは男達が一人一人に配つてくれたのだ。4人全員、横一列に座っている。

卷之三

• • • • • • • • • • • • • • • •

黙つて食べていた。なんかしゃべる雰囲気じやなかつたからだ。しかし、こうこうとき必ず一人ＫＹ（空氣の読めないやつ）がいるものだ。

「ああ・・・あげるよ、坂本くん・・・あと『 shinpo 』じゃなくて『 susumu 』ね・・・てゆうか漢字で書いたオレの名前見たことないくせになんて間違うの・・・・すすむって、自己紹介したよね

投げやりに二つ答えた進歩であった。ちなみに、「しんぽ」じゃなくて「すすむ」って読むの忘れないでね。

「うん・・・・・なあ、進歩。俺、気になつたんだけど・・・」

健八がいう。

「何？」

「うわあ、じめやしたこと嫌いだからせっかくのチャン
ドイツ、毒入つてね？」

進歩は息をのんだ。進歩は配られた5つのサンドイッチの内、もう3つも食べていた。ツナサンドは真九郎に渡したので、残りはカツサンドだけだ。

やばい、と思った。もしかしたら毒か、睡眠薬でも入っているんじや・・・と進歩は感じた。

卷之三

と豈か呴んでも、それは

真九郎も同じく。

卷之三

卷之三

まつたく面白くない、お約束の毎

裏山

お約束ではないものの、ちょっとアレンジしただけの無理やりオリジナルにした、さつきと輪をかけて面白くない展開である。

黙つていた進歩だったが、心

するところに外部にも破裂。

お前らああああああああ!!!!!!いい加減にしやがれこらあああああ!!!!後『すすむ』つて読むつて何度も言つたろうがあああああ

え、ちよちよ、待ちな、ちよちよ、ひいいいい！」

こうして車内はバイオレンスに包まれたまま、数分後に目的地に到着するのである。

「痛い、痛い、何すんね、ひどいきにょー・・・・

真九郎がぼやいた。

「せーつな！…歩くときぐらい黙つとけ！」

ここは進歩でなく健ハガツツコム。目的地についたので、車から降り、案内されているのだ。

「で、あんたら、俺らは一体どうなるわけ？身代金はいくらなんだよ？一億か？はつ。誘拐できるような度量と才能があれば一億なんてすぐ稼げると思うけどなー！」

ちょっと、ちょっと、健ハ君、あんまりそんなこといわないで。もしホントに誘拐犯だつたら殺されるつて・・・と、進歩は思つた。

「あの、みなさん。着きました。」

男の一人がいつた。へい、もうついたの、と思つて前を見る。すると、

なんと前にはすごいものが建つていた。

なんと形容すればいいのか、城のようだといえばいいかもしないが、ロンドン塔か、アレキサンマルコ教会か、といえば大袈裟かもしれないが、これだけは言えるかもしれない。『学園のようだ』。で、彼らはその学園っぽいものの門のまん前に立つてゐるわけである。

そして、進歩は学園っぽくてしかたがない、とか思つていたら、予想は確信に変わつた。なんとその門には『あはねと亞羽都学園』とでかでかと彫られていたからだ。

同時に、進歩はふつとなにか思い出しかけた。いや、ほかの三人も思い出したはず。

すると、その、もうおそらく学園と確定した建物から誰かが出てきた。黒髪の長い、藤色のスースを着た女性だ。

「ようこそ、亞羽都学園へ。私は『藤森林檎』といいます。あな

た達は、選ばれし者として、ここに来てもらいました。」

第四章・個性的だと感じるところもある（後書き）

次章から本当に新展開、いきます。亞羽都学園の由来、わかつたらす”いです。

第五章・名前でいぢつぱり騒ぐのは未熟な証拠（前書き）

長らくお待たせしました。今年初めての投稿です。

第五章・名前でいちいち騒ぐのは未熟な証拠

藤森・・・・・林檎・・・・・選ばれた・・・?

進歩は果然とした。

「ええ・・・突然呼んでしまい」めんなさい。あ、あなた達は、『真恋愛オンライン 亜羽都学園』というページにアクセスしましたね？」

「…………それで……あ、一度、みなさん、学園内にはこうして下さい！説明はそこでします！では、案内して差しあげな
れー！」

ハツ！とヤク・・・ごめんなさい・・・黒服を着た男達は気持ちよ
く返事し、こちらへ、と進歩達四人を案内しようとする。

少なくとも進歩はこのヤ・・・黒服を着た男達がヤクザ（結局使つてしまつた）とは思つていなかつた。どつちかと云うとボディーガードっぽい感じだつた。藤森さんとやらはいなくなつたが、さつと学園内とやらに入つてしまわれたようだ。

「学園内」以外の何物でもなかつた。いつしか漫画で見たようなあの清楚な感じのある風景である。歩く右側に数々の扉ドア、左側はガラス窓が平行して並んでいる。進歩が通っている学校もそんな感じのはずだが、決定的に違うのだ。正しく、端的に言つとすれば、「パラレルワールド」だろうか（ちがうと思う）。

と、進歩はこれに似たようなことを考えて歩いていると、遠くの方で声がする。わめく声のような叱るような声だろうか。そして進歩たちはその部屋の前に来て、そこに止まった。それには「校長室」と書かれていた。すると、

「手荒なお連れ方はするなどあれほど言つたでしょう……？」

「申し訳ございません！」

「失礼します。」
「どうやうな会話が聞こえた。叱つてゐるのはさつき進歩たちを迎えたあの女性に違ひない。すると案内してくれた黒服の男の一人が、

とノックをする。

そして進歩たちはそのまま通された。

いたに違ひない。

一減給 1割はきついなー」

「俺なんか減給プラストイレ掃除までだぞ」

「……俺はしたくては洞窟バス…………あああ怖くていえなし！」

という声が聞こえたが（特に三人目のセリフは）聞こえなかつたことこの上ない。

今、目の前にはデスクを構えて座っている、さつきの女性、藤森林檎さんがいた。

「えー、おほん。みなさん。突然お連れしてすいませんでした。私たちがここにお連れしたことにはわけがござります。」

「身代金がほしいのかい、青森さん。」

「藤森です。まあ・・・一回で押しつづれると、あなたの方は」

『亞羽都学園』に入学していただきたいのです。」

いわば入学手続きの様なものだつたんです。」

また健八が、

「藤森です。それは、有名会社公式という形のほうが、人を怪しが

永さん

らせずに誘導させることができるのであります。要は見かけだましまん
です・・・恥ずかしながら・・・」

「ん・・・・・・じやあ、なんでそんな強引な方法をしたんだ?少
子化?少子化か?そんなに生徒集めんの困つてんの、安永さん?」

「藤な・・・・じゃなくて藤森です。もう原型なくなつてるじゃない
ですか。えーと。実はこの学園・・・・女子校なんですね!」

ええ女子校!?!?えええええ女子校!?!?えええええええ
怨死昂!?!?・・・・・・いやいや落ち着け。ちなみに

これらの心の叫びは進歩のものである。

それにはかわらず健ハはマイペースに

「で、なんで女子校なのに俺ら男を入れることにしたの、大統領?」「
藤森です。いや、ある意味間違つてはいませんが。それはですね、
私たち亜羽都学園は、学園の名をかぶつた・・・というのはおかし
いのですが、インターネットを利用して諸悪機構をつぶす組織なの
です。」

すると鳴りを潜めていた登魯が、

「え?何?天国いんメイドさんのあの組織みたいなもの?」

「ちがいます。というか、君なんでそんなゲーム知つてるんですか
?あなた当時何歳だったんですか?いや、そのゲームを知つてる私
も私ですけど。で、インターネットはある意味最強のシステムです。
内閣、国会、裁判所、マスコミの四大権力について第五権力となり
つつあります。うまく利用すれば、世界中の情報を操作できるので
す。それで、私は数年前からこの組織を立ち上げ、あなた方のと似
たような方法で生徒を集めましたが、あえて女子限定にしました。
こんな言い方、失礼と思いますが、女性のほうが頭の回転が速く、
こういう犯罪にも敏感かな、と思つていたんで。」

「ほう。で、なんで急に男が必要になつたんだい、禁固10年大統
領。」

「藤も・・・いや、いいです。それは、思つたより成果が上がりな
かつたのです。考え方直してみたんです。やっぱり頭の回転の速い女

子もいいんですが、やつぱり男の人の、こう、強い度胸というか、行動の早さも大事と思うんです。協力しないといけないと思うんです。両方の力があつてこそ凶悪犯罪を未然に防げると思うの。」

ふうん・・・・と進歩たちは聞きほれていた。

「だけど、よく運よく男ばつか集まつたな。大丈夫だつたのか？」

後、誰でもよかつたのか、ええと・・・もういいや、藤森さん？」

「藤も・・・あ、あつてるか。それについてはですね、ある特定のIDのパソコンしかアクセスできないように設定していたんですね。過去にインターネット上で脅威の技をやってのけた方のIDを調べ上げたのです。たとえば・・・君、chun107君ですか？」

と、登魯を指していった。

「へつ！？僕？え、そう・・・だけど？」

「なるほど・・・で、あなたは確か、あらゆるセキュリティの張られたページやパソコンにハッキングしたことがありますね。」

「ん・・・ま～・・・その通りだけど・・・」

「リストはすべて挙げられますよ・・・そうやつ、『1株 600万円』の株価の表示を『600万株 1円』と切り替えたのもあなたですし、防衛庁、現防衛省のコンピューターにもハッキングして情報の一部をネットに流したのも君でしたね。」

ええええええええ！！！！すゞーすゞーつーかやばすぎるだろ
こいつ！

進歩は愕然とした。なんとあのニュースの犯人はおめーかよーと思つた。

「で、本名を教えてください。」

「山口 登魯とうじゅつていいます・・・」

すぐには彼女は続ける。

「次に、あなた、丸木怒君マルキッドですね？」

と、健八のほうを指す。

「あー・・・そうですよ青森さん。」

「帰結しちゃいましたね。あなたは9年6ヶ月16日にかけ、数万

単位ものサイトをぼろぼろに荒らしましたね。あなたは知らないかも知れませんが、あなたの荒らしのおかげで、パソコンがトラウマになつた人は1000万人を下りません。」

卷之三

進歩はまたしても驚愕した。なんと12月にやっていたオンラインゲームで、

ド・ドード魔・るせーんだよ
タク(切) てめーでなんとかしきのキモ才

と、書き込みやがつた張本人がここに現れたからだ。

進歩は当然のように怒り、健八に殴りかかつた。

でなぐるぞー。」

卷之三

「わかりました。で、君、坂本真介郎君ですね。」

「本名を教えてください。」

「…今言いたいのは…」

「ネームのとこ、本名入力したの!?」

『おれのあたま』でなんね

でうちに接続したの！？

その言葉を聴いた瞬間、進歩の手が真九郎の肩にのびる。真九郎は青ざめた。

「いや……じゃなくて……その、わしの父ちやんがな、『これからはパソコンメーカーの時代じゃ』ゆいて、『いんぴゅうたあを買つての～。で、わしちょっとこじくつたらなぜか住所やら入力せいで書いとるからその通りに従つたき』。以前も書いたけど……」

「私……何が間違つていたのかしら……あ、で、君は『ヘルまんだむ』君ですよね？」

やつと進歩の番である。

「はー。本名は、近藤 進歩です。『進歩』って書いて、『すすむ』。

「…………ええと……ひとつ言つておめたこととがあります……その……近藤君と坂本君に……」「？」

「ええと……その……私たちには……特に脅威の技をやつしてのけたという……記録がないのです……」

第五章・名前でいぢつり騒ぐのは未熟な証拠（後書き）

次回で、「ログインの手続き」編完結です！（小説自体はまだまだ続きます。）

第六章・痴話喧嘩は自重じり（前書き）

続きの投稿が非常に遅れて、申し訳ありませんでした。なんとか書き上げました。こちらの勝手な事情で長くお待たせしました。失礼ながら、まだ一章あります。

小説を楽しみになさつてた方々に、深くお詫び申し上げます。

第六章・痴話喧嘩は自重しろ

な・・・・・何もやってのけてないだと・・・・・進歩はある意味驚愕した。というか落胆した。なぜって、そりやさつきこの人、「選ばれた人間」って言つたじやん！あの一人だけじゃん！「選ばれた人間」つて！一体どういうことなの！「オ、オレと坂本君は、何もないんですか？本当に何もないですか！？」

「ええ・・・・・IDから探つても、過去15年間のデータに少しも存在しません。何が間違つてたんでしょうか・・・・やつぱり新システムを導入するのは・・・・」

「ちよいと、先生。」

「何？坂本君？」

「わしはカツオを素手で捕まえたことが・・・」

「それとこれは関係ないです！す、い、ですけどー！」

すると、扉が開く音がした。

「失礼します、校長先生。」

女生徒らしき人が一人、入ってきた。一人が四人の少年達を見てあつ、となつた。

「せ、先生！とうとうやつてしまつたんですか！私は反対していたのに！」

その女生徒は割りと短髪で、髪留めもつけずにおりしている、おまけにツリ目である。

ここで校長藤森、

「あ、その、神楽坂さん。申し訳ないわ。もう決定しなきゃいけなかつたの・・・・」

「決定つて、そもそも女子校である我校に男子をいれるなんて言語道断です！」

なかなか強気だ。進歩たちは肩身が狭くなつてこむことは言つまで

もない。すると、もう一方の女生徒が口を挟んだ。

「まあ、まあ、そんなにヒスにならなくても。」

茶髪で、髪の毛の後ろを小さく縛つており、アホ毛が特徴的なこの女生徒は、神楽坂という少女とは姉弟のような関係なのだろうか。

「美琴……お前は黙つて……」

「男なんて、もういるじゃないでスか。」

「そりや、窓先生とかはそうだけど、あれは……」

「鈍いでスね。神楽坂さん。鏡を見ればわかりますよ。『嫌』というほど』。」

大概の人は、美琴なる少女の真意を理解出来ただろう。

「ほう……それはどういう意味……？」

「神楽坂さんがおと……」

「コノヤロオオオオオオオオオウ！……！」

ケンカが始まった。一人の性格、および正しい関係が理解できる瞬間である。

そこで、なんとなく止めに入ろうとする進歩だが、

「ちょ、お二人さん、ケンカはや

「つるさい……！」

「おぶう……！」

進歩は殴られた。ちなみに進歩は親父にも、ここに辺まで書いておいて続きのわからん奴はないだらうから保留する。こんな痛みを受けるのは……別れちまつた彼女に「私、オタクな生き物は嫌いだから。」

と言われた時以来だらうか……と進歩は思つた。

しかし、すぐに殴った本人がこう言つ。

「あ、そうだ。こんなことしてると場合じやない。校長先生…またウチのオンラインであいつが！」

「何ですって！？」

緊張が走つた。進歩も心当たりがあるのかハツとなる。そして口を

挟んだ。

「あの、もしかしてそのオンラインの名前って……」

次に健八、

「あれだな……俺たちの行つてた……」

藤森もそれに合わせるように

「そう……」

これは三人同時だった。

「WILD LAND ONLINE・ワイルドランド・オンライン!」

「もしかしてそいつ、『チーターマン』っていうプレイヤーですか!?」

「そう。しばしばうちのオンラインに来ては、マナーよく使っている、罪なきプレイヤーたちを狩つて行くのです。それもとてつもないステータスなの。通常のプレイでレベル10で攻撃力5000のステータスなんてありえないわ!」

進歩と藤森の会話である。

「しかもそいつ、ほかのプレイヤーの所持金データ、装備データも破壊するの!—アクセス制限もセキュリティもまったくきかなくて、もつどうしようもないのです!」

間違いない、と進歩は確信した。あのどんでもないやつだ。そういうえば進歩の所持金も消えていたのだ。

今は、全員、主要コンピュータルームへ急いでいる。

「ハア、ハア……ここの、主要コンピュータは。」

そこはすこじ過ぎるとこりで、重そうな金属製の扉は、周りに監視カメラがついている。おまけになにやら液晶画面や数字パネル、マイクまで取り付けられている。横には、「校長、及びその認可を正式に受けた者以外の立ち入りを固く禁ず」の張り紙がある。

「特別にあなたたちの入室を許可します。」

と、いうが否や、数字パネルにパスワードを入力し、なにやらマイクにぼそぼそと話しかけ、その後、人差し指を液晶に当て、扉が横

に開いた。この間、わずか2秒である。

そして、入られた部屋の中も別世界であった。ニコースでよく見る株式市場の映像を思わせるパソコンの量と並びである。そして、部屋の奥には巨大な機械の城があった。

「さ、早く、時間がないわ。」

そしてその城へと進歩達は行く。

校長藤森はさつきの要領でパソコンへとアクセスした後、すぐに「WILD LAND ONLINE・ワイルドランド・オンライン」を開ける。

すぐに、進歩と健八には見覚えのある映像が映った。また、進歩はあの忌まわしい記憶が脳内に蘇った。

藤森はすぐにその犯人を見つけて出す。間違いない。「チーターマン」だ。

彼女は必死に説得と警告を行う。しかし、相手はあるような鬼畜な行動をするやつだ。従うはずがない。そこで、実力行使を行った。藤森は必死に指を動かし、キーボードをたたいている。タイピングゲームどころではない。キーボードを破壊せんばかりの勢いだ。おそらく追い出すためのプログラムを送っているのだろう。また、いつの間にか神楽坂と、美琴なる生徒も別のパソコンについてたいている。

三人とも懸命に戦った。しかし、

「だめ・・・・もうどうしてもできない・・・・」

「ど、どうすればいいんですか！」のままじゃうちのオンラインが

「！」

進歩たちは黙つて見つめるほかなかつた。しかし進歩はとても黙つていられる状況じやなかつた。どうしてもあのひどい輩を懲らしめたかった。とはいえ、自分はそいつには勝てなかつた。絶対に無理だろう。自分じゃどうしようもない、そう進歩は思った。すると、

「俺、やります。」

と、健八が名乗り出た。

「僕も、協力してあげてもいいよ?」

登魯もまた、力になろうとしているようだ。

「え・・・・いや・・・でも・・・そんな・・・あなた達には・・・

・

「何言つてんだ。あんた、男の度胸や、行動の早さ、そういうのも必要なんだって、いつてたろ?」

「・・・・・・・・・

「それに、今の状況じゃ何も変わらないことは明らかだ。俺らが一人加わって、良くなるか、悪くなるかはわからない。むしろ悪くなる可能性の方が強いとも考えられる。だがな! 今の状況じゃ、悪くなつても、良くなつたからわざかでも、1%、いや、それよりも低い賭けでも、やるつきやないだろう、若林さん!」

この瞬間、進歩は殴られたような衝撃が頭の中に走った。進歩は、自分に「何か」がなかつた、自分では無理なのではない、ただ腰の抜けたギャルゲオタク「だつた」のだ。進歩はもう決めた。もう戻れない。

「藤森、よ。」

そして数秒の沈黙の後、続ける。

「わかりました。さあ、一人とも、時間はないですよ。」

もちろん、すぐ後に、あるギャルゲオタクの叫びがあつた。

「待つた! 僕も、協力します!」

第六章・痴話喧嘩は自重しり（後書き）

次でいつたん終了します。しかし、すぐに新章が始めますので、そちらのほうをお楽しみにください。

番外編・リストで逃げても才能のない」とに変わりはない

ど、つも。作者の桂です。

これはストーリーではありません。番外編です。タイトルにあるとおりです。もう次が書けたのかと思つた方もいらっしゃるかも知れません。その場合、本当にすみません。

それで、何を書くといいますと、この小説の人物等のモデル、もとい、元ネタを明かしていくと思ひます。

以前からこの「いつの書」にうかと思つておりましたが、これを書くきっかけとなつたのは、久しぶりに評価をいただいたのですが、そこに、「某週刊誌のキャラと似た名前では?」と書かれました。そこで、気になつていらつしやる方々のために、こんな小説でも読んでいただけるお礼として、元ネタを掲載します。

また、評価を下された湖嶺様には、この場にかえて、お礼を言わせていただきます。

・近藤 進歩・元ネタは、週刊少年ジャンプ掲載、「銀魂」の登場人物、「近藤 勲」から。さらに元ネタを探ると、幕末の、新撰組の局長であった、「近藤 勇」から。また、下の名前は、そのキャラのアニメでの声優、「千葉 進歩」さんから。ちなみに銀魂の近藤さんも、ギャルゲ好きです。

・沖田 健八：上と同じ漫画の人物、及び担当声優の「沖田 総悟」と、「鈴村 健一」さんから。性格も酷似。次回作ではこういうキャラ設定はきちんとしようと思っています。

・山口 登魯（とうろ）：「ケロロ軍曹」の登場人物、「トロロ」と、担当声優の「山口 勝平」さんから・・・・どんどん恥ずかしくなって来ます。本当に才能がなくすみません。

・坂本 真九郎（まさくろう）：これもまた上二つと同じ、「坂本 辰馬」と声優の「三木 真一郎」さんから。本当にキャラ設定がパクリばかりです。泣きたくなります。

・亜羽都学園（あはねと）：冷戦時代に、アメリカが国防目的で開発した、インターネットの開祖、「ARPANEET」（アーパネット）から。これがわかつた人は少ないでしょうか。

では、最後に神楽坂、美琴なる少女達の紹介、元ネタ解説もいたします。また、今後はもと寝た解説はしないと思いますが、希望がありましたら、またしたいと思います。では、これからも応援よろしくお願いします。次回作も楽しみにしてください。では。

・神楽坂 ゆかり

17歳。美琴とは腐れ縁の関係。ツリ目が特徴的。男勝りな口調だが、実は意外とさびしがり屋。いわゆるツンデ的な性格といえる。元ネタは声優の「田村 ゆかり」さんから。

・沢城 美琴（みこと）

16歳。ゆかりとは先輩後輩の関係のようで実は腐れ縁。見た目のかわいさとは裏腹に毒舌。ハツキング関係も得意な上、色仕掛けも

得意。そんな嫌なやつだが、腐れ縁のゆかりと共に、ネットでは田見張るコンビネーションを行うこともある。

元ネタは声優の「沢城みゆき」さんから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481d/>

ヘルマンだむ！

2010年10月10日18時23分発行